

令和 7 年度 学校教育自己診断アンケート分析報告書

文責：首席 川端俊範

令和 7 年度の生徒・保護者・教職員を対象としたアンケート結果に基づき、現状の分析、課題、および今後の展望について報告する。

1. 調査概要

- **回答数：** 生徒 31 名（100% ※長欠除く）、保護者 6 名（43%）、教職員 14 名（88%）。
- **運用上の課題：** 今年度より Google フォームによる回答方式を採用したが、保護者の回答率が大幅に減少（43%）する結果となった。次年度に向けて、周知方法や回答環境の改善を検討する必要がある。
- **全体傾向：** 保護者からは極めて高い信頼を得ており、生徒も教育内容や相談体制に概ね満足している。一方で、教職員組織においては「学校行事の評価急落」や「組織運営の脆弱さ」といった課題が顕著に現れている。

2. 対象者別の主要分析結果

- **生徒：通学の「意義」と「満足度」の乖離**
 - 「学校に行くのが楽しい」は 77.4%（昨年度 84.8%）と唯一 80%を下回る結果となった。しかし一方で、「学校に来ている意味がある」は 90.3% へと上昇しており、通学に意義を見出している生徒は増えている。
 - 部活動の満足度は 93.5%（前年度比 14.9 ポイント増）と大幅に上昇した。これは今年度より設問文にほかの人にとっても（有意義な時間だ）」という文言を追記したことによる意識変化が要因の一つと推察される。なお、ICT 活用については 100% の生徒が肯定している。
- **保護者：高水準の信頼と参画意欲の向上**
 - 「授業の満足度」や「家庭への連絡」など、多くの項目で 100% の肯定的意見を得ており、学校への信頼は非常に強固である。
 - 昨年度の課題であった「授業参観や学校行事への参加」も 80.0%（昨年度 70.0%）へと改善が見られる。
- **教職員：教育実践の自負と組織運営の停滞**
 - 「日常的な話し合い」や「図書館の活用」は 100% に向上したが、「学校行事の工夫」は 64.3% と、前年度から 30.7 ポイントも急落した。
 - 「教職員間の信頼関係」や「問題行動への組織的対応」は 42.9% と依然として低い水準にある。自由記述では、職員会議における不適切な発言の抑制や、教務室のワンフロア化等の環境改善を求める声が上がっている。

3. 短期的・長期的課題と目標

	短期的課題と目標	長期的課題と目標
生徒	「学校の楽しさ」の再構築。部活動やICT活用を通じ、日常的な登校意欲の回復を図る。	「自己実現の場」としての価値定着。進路や生き方を考える機会（現在 96.8%）を継続提供する。
保護者	参画機会の工夫。仕事等の都合を考慮し、生徒の活動を直接見られる機会を確保する。	学校・家庭の一体化。教育方針への共感を深め、きめ細かな対応を維持・継続する。
教職員	心理的安全性の確保と行事の再検討。不適切発言を控え、行事の在り方を早急に見直す。	有機的な組織体制の構築。単なる対話を超え、個の教育実践を組織の力へ還元する。

4. 総合的な評価

本校は、ICT活用や相談体制といった「目に見える教育実践」において、生徒・保護者から絶大な信頼を得ている。しかし、その基盤となる教職員組織においては、人間関係や組織対応力に依然として課題を抱えている。

この状況を一つの「建物」に例えるなら、「最新の設備が整い、住人（生徒・保護者）からは快適だと喜ばれているが、土台や骨組み（教職員組織・信頼関係）に歪みが生じており、その修繕が急務となっている状態」といえる。今後の学校運営においては、教育活動の質を維持しつつ、教職員が安心して一体となって動けるような「内部の立て直し」を最優先事項として取り組むべきである。